

---

# 俺とZな彼女たち

相馬十

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺とZな彼女たち

### 【Nコード】

N3500BA

### 【作者名】

相馬十

### 【あらすじ】

「隠れオタ」の男子高校生「吉良一途<sup>きりこういち</sup>」は、同じ学校の教師である姉の命令で新しいオタ系部活を作らなきゃいけない羽目に。

期限はわずかに一週間。その間に自分を除いて部員を3人集めなければならぬ。

部員探しで起こるドタバタな日常。次々と一途の前に現れる「残念」な「Z」級の美少女。

そんな 隠れオタ系青春グラフィティ。

ゼット【Z/z】

? 英語のアルファベットの最終の字) (。

? z 数学で、x、yに次ぐ第三の未知数・変数・座標軸として使われる記号。

アルファベットの最後であることから、これより上位のものは存在しない・最終・最高・究極、などの意味を込められる。

大辞林/ウィキペディアより引用

「吉良<sup>ユリカ</sup>くん。起きてください!」

耳朶を叩く少女の高い声に、椅子に座ってうとうととしていた俺  
吉良<sup>ユリカ</sup>一途は驚いて目を覚ました。

「……………え?」

目の前には声をかけた超本人 川尻<sup>かわじりあいら</sup>四十里の端正な顔。彼女は机に手をついて、俺にキスしてくるんじゃないかって距離まで顔を近付けている。

川尻<sup>かわじり</sup>の大きな茶色<sup>ブラウン</sup>の瞳が俺を射抜く。小さなサクランボのような唇から目を離せない。

な、なんだ？　ここはどこだ……？

記憶が混乱していた。俺は川尻の唇から必死の思いで目を引き剥がすと、寝とぼけてはつきりしない頭で周囲を見回した。

目に入ったのは、日当たりだけはやたらいい、段ボールだらけの室内の様子。

そしてすぐに気付く。ここは俺が通う高校の校内　俺が所属する『禅道研究会』の部室だということに。

……だんだん思い出してきた。たしか俺は部室に一番にやってきて、他の部員が来るのを待っていたはずだった。しかし春の午後の暖かな陽気に誘われて、ついうとうととうた寝してしまっていたのだ。

「ね、ねえ……ききき吉良くん！　こ、こっち向いてくれませんか？」

続く川尻の声が俺を完全に覚醒させた。俺は言われるがままに視線を川尻に向ける。

「き、聞きたいことがあるんですけどっ！」  
頬を紅潮させ、呼吸を荒くして俺に詰め寄る川尻。

……ちょっと、いや、かなり怖い。

「は、はい。なんででしょう？」

川尻の丁寧語の迫力に圧され、俺も思わず敬語で返答。

「ど、どうして岸辺きしへさんのことを、フ、フレンドリーに、は、はは『二十日』って名前じゅうじつで呼ぶようになったんですか！？」

「……え？　ああ、それは」

「 わたしが何か？」

そのとき 俺の言葉を遮って、凜とした声が割り込んだ。

声が出したのは部室の入り口。そこに、まさに「容姿端麗」な美人の姿があった。

切れ長の目を眩しそうに細め、柔らかい春風にふわっと煽られる長い黒髪を手で押さえている。その美人の名前は「岸辺二十日」。

俺、そして川尻と同じ、都立園崎高校そのときの一年二組のクラスメイトで、同じく『禅道研究会』の女子部員である。

ハツカは俺と川尻の顔を交互に見比べると、ふんと鼻を鳴らした。

「……状況がよくわからないけど、落ち着いた方がいいわよ、川尻。いや……『尻肉』」

「わ、わざわざ言い直してまで『尻肉』言わないでください！ だからそれ『はがない』のパクリです！」

「ふ。ゆとりはすぐに似たようなものをパクリパクリと言う……。いいこと？ これはオマージュというもののよ。そのへん混同しないほしいわ」

「い、言い訳がましいことを！」

「模倣は文化の発展の第一歩。わたしは模倣を否定しないわ」

なんだかすごくどうでもいいことと言い争っていると思うのは気のせいではないだろう。

……仕方ない。ここは形だけとはいえ、この部の部長である俺が収めねばなるまい。

と、俺がノープランのまま何か言おうと口を開きかけたとき、川



一方。

「……ちっ！」

ハツカは眉間にしわを寄せて舌打ち。

……なんだろう、この「ラノベのハーレム展開っぽい」状況は。

いや、勘違いするなよ俺。ここで勘違いしたらあとあと面倒なことになるぞ。

あくまで俺の目標は「静かに目立たず暮らす」ことだ。美少女が俺を取り合って意見をぶつけているなんて思い上がった妄想は捨てるんだ。

そう。そんなことはあり得ない。

だって、始まりは

真正のオタクは大きく二タイプに分かれると思う。

「隠さず堂々」としているか、「隠してこそこそ」しているかだ。

前者は周囲の視線も気にせず己の道を邁進する超絶エリート。同好の士で集まってコミュニティを築くなど、アグレッシブに行動して趣味生活を満喫する勇ましい人たち。

一方、後者は自分がオタクであることを隠して生活している人のことだ。隠れオタとも言い、中には周囲にバレたらすべて破滅すると思っっている人もいる。

なお、晴れてこの春高校に入学した俺　吉良一途は間違いなく後者。

これまで「あくまで漫画やゲームが軽く好きな程度ですよ。アニメ？　ジブリとドラえもん和ワンピースくらいは観たことあります」なスタンスでやり過ごしてきた。

だが実際は　昨夜も深夜二時台放映のラノベ原作アニメをリアルタイムで視聴し、今朝は六時に無理やり起床。某フランス皇帝以下の睡眠時間で満足できる身体ではないとわかっているのに、どうしても例の板の実況スレに入り浸るのをやめられない。そういう「間違いいようのないほど間違っちゃった」オタクなのである。

そんな俺がなぜオタであることを隠すのか？　理由は簡単。

最近ではだいたい市民権を得てきたオタクだが、世間的にはいまだに白眼視されていることは説明するまでもないだろう？

特に学校でオタバレでもしようものなら、その手の趣味に寛容でないクラスメイトたちから腫れものに触るように扱われることは必定だ。

だから 新しいクラスでの生活が始まったばかりのこの時期。小心者の俺は過去に心がけてきたとおり、オタクであることを隠しつつ、当面は目立たず騒がず。悪目立ちして出る杭にならないようにと心がけていた。

そうした生活も今日で四日目。

朝の通学時の満員電車ラッシュアワーに乗るのもこれで四回目となる。運良く空いた席に座れた俺は、車内に漂う温い空気を肺いっぱい吸い込んだ。乗車してまだ五分しか経過していなかったが、慣れない満員電車に心身ともすでにへとへとだった。そのせいか、席についた途端すぐに睡魔に襲われた。電車の揺れに心地よくなり、うつらうつらしていると

?まったく、小学生は最高だぜ!!!?

車内に鳴り響いた「声」が俺の眠気を一気に吹き飛ばした。

.....おい。

「こりゃラノベ原作の女子小学生による熱血バスケットアニメ、『ロウキゅーぶ!』の主人公のセリフじゃないかよ! え? 何? 何で?

?まったく、小学生は最高だぜ!!!?

え、また!?

キヨドる俺をあざ笑つかのように、続けざまに同じ「声」が満員の車内に響く。

その「声」は俺のいる場所のすぐ近くから聞こえていた。

それはどうやら携帯電話の着信音　着ボイスのようだった。

ざわめく車中。そりゃそうだ。セリフの意味を知らなければ小児ちっち愛好者やい子好きみたいなことを言ってるように聞こえるんだから。

それにしてもよりにもよってなぜこのセリフなんだろう……?

と、気になった俺は周囲に視線を向けようとして、そこで目の前に立っている他校の男子高校生がニヤニヤ笑ってこっちを見ていることに気付いた。

なんだそのやけに嬉しそうな顔は？　もしかして俺のことを同類だと見抜いたのか？　そりゃたしかにセリフを聞いてキヨドリはしたけど、そんなのいまのヤバげなセリフなら誰でもそうなるだろう？　いまの俺のどこにオタバレする要素が含まれてるんだっての。この、名前と声優似の地声以外はすべてに於いて目立たないという、まったく自慢にもならない容姿は伊達じゃない……って、あれ？　この「声」が聞こえてくる場所ってもしかして

俺は上着の内ポケットに手を突っ込んでケータイを取り出した。

……あー。

俺のケータイが鳴り響きまくってました……。

「わぁいー!」

思わずオトコの娘がどーたらこーたらとかいう「編集者いいぞもつとやれ！」な雑誌名の感嘆詞を口にしてしまう。

予想外過ぎた。いつもはバイブ設定だったからまさか自分のケータイが鳴っているとは思いつかなかった。

とにもかくにも。恥ずかしさで絶叫したくなる衝動を必死に抑え込んであわあわしながら電源を切る。それからすぐに車内の良識ある人々による「あの人ちよつと危なくない？ 小学生がどうこうつて……」的な視線を振り払うように、羞恥で熱くなった顔を伏せて寝たフリを決め込んだ。

心の中では大号泣。背中からは涙のように冷たい汗も流れている。

そのまま寝たフリをしつつ、薄目を開けて周囲を確認すると……つてくそう、もうあっちゃこっちゃからすげー目で見られてるじゃないかよう。俺と同じ学校の制服を着たマスクの女子なんか睨むようにじつとこちらを見てるし……。

やめてくれ。そんな目で俺を見ないでつて。ちゃんと二次元と現実の区別はついてるから！ 俺大丈夫だから！ いや、だからおい。目の前のお前。スタンド使いはスタンド使いと魅かれあうとか思ってたんじゃないだろうな。「俺も！ 俺も！」みたいな顔でケータイ取り出してんじゃないよ。いや、わかったから。そのストラップはたしかに『ロウきゅーぶ！』のゲームのショップ特典の「ブルマ型携帯クリーナー」だったのは知ってたからチラチラチラチラ見せなくてもいいから。それ、俺も持つてるから！ ひな最高だから！

そして

居た堪れない気持ちになった俺を乗せ、それでも電車は目的地へと向かう。

もちろん次の停車駅で一旦下車して、電車を一本遅らせました。

隣の席は新学期が始まってから三日間、誰も座ることがなかった。

ちなみに俺の席は窓際列の前から四番目。右隣の席は女子の列だ。欠席している女子生徒は「岸边二十日」という名前だった。「二十日」と書いて「ハツカ」と読むらしい。俺も人のことは言えないがかなり変な名前だと思う。

もしかして、いわゆる「一度も登校しないでフェードアウト＆ドロップアウト」という人なのかな？

……などとぼんやり疑り始めていた新学期四日目の朝。

朝の電車でのこと。「小学生は最高だぜ」着ボイスもあって、内心びくびくしながら我が一年二組の教室に入った俺を待っていたのは 不気味なほどの静寂。

いまはホームルームが始まる前の待機時間だ。この時間、昨日までは当然のように騒がしかったものだが、今朝は誰ひとりとして席も立たず、話どころか声すら出してない。

何かあったのか？ と小首をひねりながらも俺はとりあえず自分の席に向かう。すると、そこでクラスメイトの静黙の理由を察した。

ものすごい美人が俺の隣の席に座っていた。

あまりの美しさに俺は息を飲む。

横顔だけでも「見ていて声を失う」ほどの怖いくらいの美人だった。肌は白く、目は二重できりっと涼やかで、うわっと思うくらいまつ毛が長い。鼻はすっ通っていて、唇は化粧も何もしてなさげ

なのにピンク色。いまだき珍しいくらいの長い黒髪はきらきらと輝いているように見える。

それは、化け物じみた凄絶な美。

間違いない。この人だ。この人がいるから、教室は静まり返っている。

近所でも美人と評判だった姉がいるため、綺麗な人はだいぶ見慣れていると思っていた俺でさえ気後れする。だが、それでも彼女から目をそらすことができない。

その女子生徒 岸辺二十日さんは周りの静けさをまったく気にしていない様子で、大きな黒い瞳で睨むように文庫本を読んでいた。何を読んでいるんだろう？ と気になるも、書店のブックカバーが掛けられた文庫本ではわかるはずも

……つて、ちょっと待て。

目に入ったのは何の変哲もない茶色の紙のブックカバー。書店で本を買えば付けてもらえる類のものだ。

だが、俺はそのブックカバーを見て驚く。

メロンボックス……？

俺が見間違うはずもない。あのブックカバーに印刷されているマークはメロンボックスのロゴだ。

メロンボックスとはいわゆる同人誌やコミックスなどを専門に扱うオタク御用達の同人ショップである。我が地元「オタク受難の地の静岡にもあり、実家にいたころはよく利用させてもらったものだ。

そのメロンブックスのブックカバーの付いた本を、漫画すら読みそうにないイメージのすごい美人が読んでいる……？

え、どういうこと？

先述したとおり、メロンブックスで取り扱う商材は基本「オタク系」のものである。

そのカバーが付けられた本ということは間違いなくそっち系のものである。本のサイズは文庫であるから、考えられるのは漫画文庫かコズミツク・ホラーとかカラノベ。それが文庫サイズの同人誌。いや、でも待て。ブックカバーがメロンだからって、中身もメロンで買ったとは限らないだろう。家族か誰かのカバーをもらって普通の本に付けたとも考えられるし。そう、それなら家族の誰かから借りた本を読んでいるという線だつて。となると読んでいる本はやっぱりラノベとかなのか、いやいやそれより何より、なんで

「……なんでメロブ……？」

いろいろと考え込んでいるうちに、俺は無意識で心の中の疑問を口に出してしまった。ちなみにメロブとはメロンブックスの略称だ。すると次の瞬間。

「……え!？」

と、透明感あふれる驚きの声を上げつつ、彼女 岸辺さんが一瞬俺に顔を向けた。続いてあわてたように自分が持っている本を閉じ、そのままブックカバーに目を落とす。

「はうつ!？」

それから岸辺さんはくしゃみした犬みたいに息を吐き出すと、顔色を朱に染めて俺のことをすごい勢いで睨みつけた。

「!?」  
その形相に思わず息を飲む。

眉間に深いクレバスのようなしわを刻み、形良い双眸を細くして、  
岸辺さんが無言で俺を凝視する。

凍る視線は絶対零度のブリザード。

「い、あ……」

彼女の視線に圧倒され声が詰まる。思うように言葉が出てこない。  
まるで怜悯な刃物をのど元に突き付けられているかのような威圧  
感。冷たい汗が背筋を伝う。

……そうしてどのくらいの時間が経ったのだろう。あまりの緊張  
にどうにかなくなってしまいそうだと感じ始めたそのとき　ようやく  
始業を報せるチャイムが鳴った。

すると、まるでそれが合図だったように岸辺さんが俺から視線を  
外した。途端、俺にかかっていた圧力がすっと消える。

俺は見えない縛めから解放された気がして、ほぅっとして深く息をつ  
いた。

そして、気付けばいつの間にか担任教師も入室していて　何事  
も無かったかのようにホームルームが始まっていた。

呆然と見る窓の外の景色は抜けるような青空。

だというのに。俺の気分は晴れなかった。

昼休み。

「いつちゃん。お願いと言つかめーれー！」

と言いながら、とても血が繋がっているとは思えないほど俺とは顔の造作が違いすぎる我が姉　吉良千秋きんじゆう二十二歳独身新卒一年目教師が、俺の頭を抱えて鉄人ルー・テーズばりの見事なまでのヘツドロツク。

観客の誰もいない青空広がる爽やかな屋上という名のリングで、身長一七〇センチの姉ねえさんが一六七センチの俺の頭をがちりホールド。ねーさんの紺のぴつたりしたスーツを押し上げている巨大な胸肉が俺の顔にぎゅうぎゅう押し付けられる。

頭はギリギリと締められているのに、顔はちょっと気持ちいいのはなぜなんだぜ？

なんでこんな目に遭わなきゃならないのか、と小一時間問い詰めたくなるような現状に、俺はここに至るまでのことを思い返していた。

### 回想スタート

あの朝の出来事がきっかけだったのか……午前中の間、事あるごとくに右隣の席の岸边さんが俺に親の敵を見るような視線を送り続けてくれた。そのため、俺はずっと針のむしろにいるような居心地の悪さを感じまくっていた。

絶対メロンブックスの件だよなと思いはすれど、俺からは彼女に何を言えいいのかわからなかった。いや、「何を言えいいのか」というよりも、彼女に睨まれるとものすごい威圧感を感じて「何も

言えなくなってしまう」のだ。

まるで蛇に睨まれた蛙のように。

人間はとてつもなく大きかったり、神々しかったりするような存在と相對すると、それに威圧されてしまうこともあるらしいが……。まさに彼女の眼光はそんな感じで、見つめられていると息が詰まって声を出すことすらできなくなった。

まさか同じ年の女子に眼力で黙らされることになるとは……。きつとあれが邪気眼とか魔眼ってヤツに違いない。

そんな岸辺さんがいる影響なのか、その日のクラスは不気味なほど静かだった。

皆、岸辺さんの存在に圧倒され、まるで騒がしくしたら「神罰」を与えられると恐れているかのように 休み時間になっても誰ひとり会話どころか、咳払いひとつすらしようとしなかった。

はつきり言って異様な光景。当然、昼休みが始まっても教室はしんと静まり返ったまま。

俺も腹の虫が鳴るほどの空腹ではあったが、そんな状況で机に弁当広げてもしゃもしゃ食べるほど豪胆じゃないし、場所を移動しよつかない……。などと考えていたらケータイに着信があった。ああ、ちやんとバイブ設定に変更してあったので、例の着ボイス「小学生は最高だぜ！」は流れませんでしたよ。

ディスプレイには「ねーさん」の表示。

そついや朝の電話の着歴を確認してなかったことを思い出しながら（とはいっても俺のケータイに電話をかけてくる人はいまのところねーさんしかいないのだが）電話に出た。正直気まずい状況を回避できてちょっと助かったかも、などと思っていたら、

『いっちゃん。すぐに本校舎の屋上に来てー。大至急』

とだけ一方的に言って返事も待たずに電話が切れた。

で。岸边さんの視線から逃げるように、そのままどこかで食べられるようにと弁当を持って急いで屋上に向かったところ。この都立園崎高校に教師として勤め、二年生の現国を担当しているねーさんが施錠された扉の前で待ち構えていて、本来なら生徒立ち入り禁止の校舎屋上に連れ出されたという次第。

はい。回想終了。

激しい物理的な方の頭痛の中、走馬灯のような回想が終わったと同時に、ようやくねーさんが俺の頭を破壊寸前だったその手を離してくれた。本気で頭を抱えてのたうち回りながらとにかく俺は用件を聞くことにする。

「朝はなんで電話掛け直してくれなかったのよー。おねーちゃん、授業中も電話来るの待ってたんだよー！」

成人式をとうにクリアした年齢の姉がぶつくーと頬を膨らます。

「……いや、授業に集中しろよ公務員。それより俺のケータイの着信音設定、勝手に変更したのねーさんだろ？」

「ちやくしんおんせつてー……？ あー！ うん、そうよー。試しにいつちゃんの携帯で『ロウきゅーぶ！』の着ボイスダウンロードしてみたのよー。忘れてたー」

「忘れるなよー！」

「いやー。あるとき私の携帯どつかいつちゃっててねー。テーブルにいつちゃんの携帯が置いてあったから、それで試し聴きしようとしてー。そのまますっかり忘れちゃったー」

「だから忘れるなよー！」

「まあまあ、それより何よりー」

ねーさんは俺の訴えを軽く一蹴し、綺麗に切り揃えられた髪の毛を払いながら、

「おねーちゃんがピンチなのです」

ダメそうなエロゲのタイトルみたいな台詞をのたまってからさらに続けた。

「今朝の職員会議で言われたんだけど……。この高校の教師は必ず部活の顧問を引き受けなきゃいけないんだってー」

「へえ……」

それほど関心も無かったので、俺は適当に相槌を打つ。

「でね、もしかしたら私、柔道部か相撲部の顧問にさせられてしまいかもしれないの……。両方とも顧問だった先生がほかの学校に異動になって、いまも誰がやるかでもめてるらしいのー」

「……なあ？　そういうのって新学期始まる前に引き継いどくもんじゃないのか？」

「だよねー。たぶん新任に有無を言わず引き継がそうという策略と見たー」

「別に策略じゃないだろ。それに柔道部はともかく相撲部はないんじゃないか？　男しかできない部活の顧問を女がやるってのはさすがにどうかと」

「なんかそういう漫画もあつたし大丈夫ですよ、って強引にー。『帯をギュツとね！』とか『花の女子高相撲部』とかってー」

「……前者のは知ってるけど、後者のは何だよ……」

ああ、きつと俺の知らないマニアックな漫画に違いない。

言い忘れていたが、俺がオタクになった原因は間違いなくこの姉にある。家に普通に漫画本とか大量に置いてありゃそりゃ読むようになるってなもんでしょ？

実際、父や母、兄や姉の影響でオタクになりましたって人はすっ

「ごく多いと俺は思うがどうだろう。」

そんな、俺をオタクにした元凶であるところの姉上様は、現在、目の前でなぜだかくねくねと体をくねらしている。

「でもねー、やっぱり私みたいな魅力的な女教師がそんなところ行っちゃったら何されるかわかったもんじゃないでしょー？ エロ同人みたいにー」

「そのネタいろんなところで聞くなー……」

「おねーちゃん貞操のピンチよ。アレ臭い部屋なんかに入ったらそれだけで妊娠しちゃうかもー」

「アレ臭い……？」

抽象的な言葉に首をひねる。

「具体的に言うといっちゃん部屋のゴミ箱の匂いー」

「ちょー！ いろいろ悩んじゃうからそういうことは本人に言わないで」

「かわいい顔してても男の子。することはしてるのよねー……ふう」

「だからしみじみ言わないで……」

「でもね、それを回避する手段もあるのー」

俺の部屋のゴミ箱の話も華麗に回避スルーされたので、俺は黙って先を聞く。

「そのふたつ以外の部活の顧問になっちゃえばいいのよー」

ああ、なるほど。というかその回避法アリなんだ。

「というわけでおねーちゃんのピンチなんでー、いっちゃんは一週間以内に新しい部活をさくつと作りなさい。めーれーです。それ以上経つと、おねーちゃん強制的に寝技の園か裸の王国に放り込まれてしまうからー！」

「は？」

その言い方は柔道と相撲に失礼すぎるだろ、と思いながら、俺はもう一度ねーさんに重要なところを聞き返す。

「部活を作る……?」

「うん。部員が最低四名いてー、活動内容がはっきりしててー、顧問がいればそれで申請可能だからねー。あ、運動系はめんどいからインドア系にしてよー。あ、あとあと、漫画とかアニメとかゲームとかできるのにしてー。部室でだらーっとできる感じのねー」

「……いや、申請下りないだろそれじゃ」

「うん。だから表向きはちゃんとした活動内容にしておいてくれればOKよ。それこそ今風に『隣人部』とか『奉仕部』とか『自らを演出する乙女の会』とか名前付けときゃ」

「ちよっ！ ダメだろそれ」

食い気味にツッコむ俺に、ねーさんは満面の笑みで答える。

「ま、それっぽい活動内容を決めて部員を集めといてくれれば、あとは私の方で書類とかは対応して、申請が通るようにうまくしておくからー、ね?」

「……それならもう全部ねーさんがやつちゃえばいいのに」

だが、そんなストレートな俺の意見はすぐに却下された。

「ダメー。部活創設の申請は基本的に生徒が行わないといけないのよねー。それに私が動いたことがバレるといろいろまずいのはわかるでしょー? いまも職員室をさりげなく抜けてきてる状態だしー」

……」

「いや、でも……俺がやつたらそれはそれでまずくないか?」

『姉』が顧問になる部活を創設するのに、『弟』の俺が申請する。

それはもうねーさんがやらせてるってバレバレだろう。

だが、俺のそんな問いは、

「ん? そこはそれ!」

という便利な言葉で却下された。

「それに、いつちゃんが部員を期日までに集めてくれれば、申請者

の名前はいつちゃん以外の子にお願いできるじゃない？ それで万事解決！。だからお願いね。くれぐれも一週間以内にー！ 来週の木曜夕方がタイムリミットよー」

「ちよ、おい、本気？」

「うん。もしできなかったら……たぶんいつちゃんの部屋が大変なことになるかもしれないのー。たとえばいつちゃんの大事なフィギユアの頭が全部『トイ・ストーリー』のウツディーのエロ顔と入れ替わってるとかー。たとえばPCを立ち上げるたびに淫乱ディベアが壁紙設定されるとかー。たとえば『課題』って書いてある例のフォルダの肌色の中身が姉系以外すべてBLEゲーのアへ顔ダブルピーススチル画像に差し替わっちゃうとかー」

「ふ、ふん！ その程度なら全力で受け止めて見せるぜ！ バッチコイだ！」

言いつつ、今日家に帰ったら即行でPC内のデータをRに焼いて隠してしまおうと決意。しかしいつの間にかパスワードバレたんだよ……。

すると、ねーさんは急に真剣な顔になって、

「……じゃあ、実家に報告しちゃおうかなー。『いつちゃんは高校入学してから、約束していた勉学に励むことなく毎日遊び呆けてますよー』って。そしたらどーなるのかなー？ きつと実家に強制送還決定だねー。またあの修行の日々が始まる」

「うわー！ー！ー！ー！ それダメ！ やめて！ まじで勘弁してください！」

俺はねーさんの言葉を遮って頭を深く下げて懇願。と、同時に過去のつらく苦しい記憶がフラッシュバックのように蘇って体が勝手に小刻みに震えだした。

「冗談じゃない！ ようやくあの地獄の修行の日々から解放されたんだ！ もう二度と帰りたくないって！」

俺の実家は寺である。

なんでも奈良にある有名な寺院の系統だそうで、小さいながらも由緒正しい歴史を持っているという。俺はその二男、第三子として生まれ、有無も否応も言う間もなく幼少時から厳しい修行を受けさせられていた。

思い出すだに恐ろしい。写経、写仏は当然のこと。座禅に水行、川行、滝行と「お前だけ冷たい水好きなんだよ！」ってくらいの水関係の修行。もちろん夏冬関係無く。冬場はもう何度死を覚悟したことが……。

そんなデンジャラスな毎日に嫌気がさした俺は、すでに上京していたねーさんを頼って東京の高校を受験。そのまま実家から逃げるように、というか実際に逃げてきてこの町にやってきたのである。

そう。俺にとってこの東京での高校生活は、ようやく訪れた平穏な日常なのだ。奪われるわけにはいかない！

「  
.....  
」  
やります」

俺は下唇を噛みしめつつねーさんに宣言。ねーさんはうんうんと嬉しそうに頷くと、

「ん。いい返事！ ふふ。いっちゃんの生殺与奪権はおねーちゃんが握っていることを常々お忘れなく……じゃ、さっさと部活を作っちゃってねー！ よろしくねー」

と言ってなぜか投げキッスを飛ばし、俺に屋上の鍵を渡して施錠してくるように言い残すと、そそくさとその場をあとにした。

ねーさんの長所（たかみち）と短所（ひそみち）は、どちらも「やると言ったことは必ずやる」ところである。だからこのお願いに対応しないと本当に実家に報告されてしまうことは間違いない。

というわけで。俺はこの勝ち目のない戦いに挑むことを、屋上でひとりいやいやながらも決意するしかなかった。

なんだか太陽がやたら眩しかった。

で。せっかくだからそのまま屋上で弁当を食うことにした。

見上げれば碧落。

こんな気持ちのいい天気の日、青空の下で食事ができるチャンスなんて滅多にない。どうせなら今後も屋上に自由に出入りできるよう合鍵を作っておきたいところだが、いかんせん放課後には鍵を返却するように姉上から仰せつかっている。残念だが合鍵作製はあきらめるしかないようだ。

さて、どこで弁当を食べようか？

俺はどこか腰かけられそうな場所がないかと周囲を見回し　そして「それ」に気付いた。

誰もいないはずの屋上に人がいる。

それも、俺が知っている人が。

「　岸辺……さん？」

そこにいたのは、またもやものすごい形相で俺を睨んでいらつしやる岸辺二十日。

春風に長い黒髪とスカートの裾を翻し、片手にコンビニ袋を提げ、棒立ちの姿勢でこちらをじっと見つめている。俺と同じくらいの身長彼女の視線が、見下ろしも見上げもせず、まっすぐに俺の目を貫く。

その視線になぜだか心臓を鷲掴みされたような気分になる。

「……聞きたいことがあるわ」

岸部さんが静かな口調で言う。屋上の空気を切り裂いて、透明感のある声が俺の耳に届いた。

「あなたオタクよね？」

「……………へ？」

俺はたっぷり時間をかけてようやく声を絞り出す。のどが張り付いているようで声が出せず、それだけ言うのがやっとだった。

岸辺さんは端正な顔を引き歪める。

「油断してたわ…………ブックカバーを変えるのを忘れていたなんて…………。いえ、それよりも、あのブックカバーがメロンのものだとわかるのはその筋の人でしかないはず。やはりあなたオタクでしょう？」  
声は出せないながらも俺は深く納得する。たしかにあのカバーがメロンブックスのものとわかるのは、少なくとも「メロンブックスの存在」を知っている人だけだ。それはすなわち「オタク」かそれに近い人種だろう。普通の人なら本のカバーまで気にならないものだと思う。

岸辺さんは胸の下で腕を組み、同級生女子平均より一回り以上は大きそうな胸を強調するような姿勢で、さらに俺を睨みつけた。

「それと、いまの女の先生…………あなたのお姉さんだったのかしら？  
その…………会話を途中から聞かせてもらっただけだ。アへ顔ダブルピースという言葉が自然と使っていたことから考えても間違いないわね」

…………その顔で、その綺麗な声で、まさかそのような言葉アへ顔ダブルピースを聞く羽目になるとは。まったく嬉しくないどころかなぜだかとっても悲しくなるのは男の純情ユユだろうか。

「…………あと、あなたの顔、どこかで見た覚えがあつて。その、声が

すっごく声優の宮野 守に似てるから覚えてたんだけど  
「  
そう言つと、

「あなた、今朝の電車で『ロウきゅーぶ!』の着ボイス鳴らしてた人よね? 『まったく、小学生は最高だぜ!』『っっていうの』  
ドツギヤーン! とジヨジヨ風に固まる俺。

……いたのですか、あの場に、岸边さん……。

そういえば、車内でマスクをしたやけに目つきの鋭い女子が俺のことを凝視していたのを思い出した。

あれはきつと岸边さんだったのだ。あのときも緊張から嫌な汗をかいていたものだが、それはもしかしたら岸边さんの視線が影響していたからかもと思い返す。

「それを思い出して 午前中の間、ずっとあなたのこと観察させてもらってたわ。そして、それらのあなたの行動から類推して、どうやらあなたもわたしと同じ『隠れオタ』であることを確信したのよ! どう? 凶星でしょう?」

岸边さんも隠れオタでしたか……。

なるほど。午前中俺のことをずっと睨みつけていたのはそういうことだったのか。

「あなたがわたしと同じなら話は早いわ。ねえ? あなたもオタクであることをバラされたくないタイプなんでしょう?」

はい。そのとおりです、と言いたかったけど、声が詰まって出なかったので、肯定の意味を込めて首を縦に振る。そうしながら気持ちを着かせようとゆっくり深呼吸。いいか、素数を数えるんだ、俺。

「もちろんわたしもそう。だからあなたにいつバラされるのかとび

くびくしてただけ……あなたも、その……結構なぼっちっぷりで……」

「ぼっち違う！ まだ新しいクラスに馴染んでないだけ！」

あ、声が出た。

「あ、そ、そう……」

なんですかその「ああ、本物のぼっちはそういうこと言うよね。同じだからわかるよ」みたいな、こいつどこからどこまでも自分と似通っていて嫌だ的な表情は。俺はぼっちじゃないぞ、まだ！

「ま、まあ、ぼっちかぼっちでないかはともかく。ここからはお願いというか交換条件。お互いオタクであることは周りの誰にも絶対しゃべらない。どう？」

もとより誰かに話すも何も、まだ仲のいいクラスメイトはいないし、いたところで話す気もないけれど。……いや、だからまだぼっちではないと全力で否定したい。

「あ、ああ。うん。はい……」

落ち着いて深呼吸したからか、それともさきほどの自己弁護「ぼっち嫌」のためめのツツコミが効いたのか。岸边さんを前にしてやっと普通に声を出せるようになってきた俺はそう返答する。

岸边さんが大きく頷く。

「よし。じゃ、そういうことでいいわね。お互いのためにくれぐれも他言無用よ」

「……ああ、わかったよ」

俺がそう言うとき岸边さんは深く息を吐き出した。

「は……あなたのあとをつけてきて正解だったわ。もしクラスの皆にオタバレしてしまったら、いま以上にクラスでハブられるに決まっているから……。もう、新しいクラスでこれ以上嫌われるのはいくらぼっち慣れしているわたしでもさすがに勘弁してほしいし」

「え？」

何を言っているんだろうかこの人は？ という疑問を込めて岸辺さんを見返す。彼女は意気消沈しているみたいな顔で自嘲するようにため息をついた。

「……ふ。ぼっち仲間みたいだから隠さず言うけど、あなたも見てたでしょ？ わたしがいるとクラスがすっごく静かになるのよ。小学生のころからいつでもどこでもそう」

「あ、いや、それは」

俺はうろたえて反論しようとするが、

「あなたはどうやら同類らしいと察知したから、話しても大丈夫かかって思って、勇気を出して話しかけたんだけど……他の人はわたしから話しかけてもみんな目をそらして無視するのよね……。だからいままでなるべく人には話しかけないようにしていたくらい」

……あー、それは違つぞ、岸辺さん。

岸辺さんがあまりにも美人すぎる上、ものすごい目で睨むから威圧されて声が出なくなるんだよ。そのことに本人気付いてなかったのか？

だが、そんな俺の考えとは逆のことを、彼女は当然理解しているといった感じに、

「……わかっているわよ。みんなから嫌われてるんだってことぐらいだつて、体育の授業でもペア組んでくれる人はいないし、お昼はいつもひとりだし、中学のときの修学旅行の班決めでも、わたしだけひとり最後までどこの班にも入れてもらえなかったし……。結局、当日休むことで回避したけど」

「ええつと……」

そのエピソードは実感でき過ぎて胸に突き刺さる。けど、彼女の経験したものと俺とのそれでは、内容は同じでも周囲の人々側の受け止め方が違つと思われた。

「さっきだって、わたしが教室からいなくなった途端、室内が急に騒がしくなったのよ。新しい学校生活が始まるプレッシャーでしばらく体調崩してたから、今日が初登校だったっていうのに……。またぼっちの日々が始まるのね……」

切れ長の二重の目を伏せてコンクリートの床を見る岸辺さん。長い睫毛の影が落ちる。

これはまさか。彼女は「美人過ぎてぼっち」という漫画かラノベでしかお目にかかれなかった例のアレなのか。しかも『ロウきゅーぶ!』やアへ顔ダブルピースという言葉を理解しているところから見ても、かなりの高レベルのオタクのようでもある。そんな希少種が実在するとは夢にも思わなかった。

とはいえ個人的には周りの反応の方に同意してしまう。洒落にならないような美人と同じ空間にいるというのは、息が詰まる以外の何物でもない。

現にいまの俺がそうなわけで。もう、さきほどから緊張しまくっている。現在もだいたいぶ落ち着いたとはいえ心臓は早鐘の如く鳴り響いていて痛いくらいだ。

とにかく、なんでもいいからこの状況を変えたい。何かないのか？ 何か、と視線を下に向けると、俺の右手に弁当箱。

「……とりあえず。時間もなしし飯食わない？」

晴天下の屋上。

俺は転落防止柵<sup>フェンス</sup>下のコンクリートブロックに座って、晴れ渡る空

とは対照的に陰鬱な気持ちで、自作の弁当の中身を機械的に口に運ぶ作業に没頭した。

現在、俺の右横には人ひとり分のスペースを空けて岸辺さんが座っている。これは奇しくも教室の席配置と同じだった。

大口開けて弁当をかつこむ俺とは対照的に、岸辺さんはメロンパンを白くて細い指で小さくちぎっては小さな口に入れていく。その様子が横からちらちらと目に入り、どうにも落ち着かない気持ちになるのは健全な男子としては当然のことだろう。

結局、一気食いに近い勢いで弁当を空にし、俺だけ先に食事終了。岸辺さんは俺の方に顔を向けることなく、黙々と食事を続けている。

……さてどうしよう。

成り行きでこうなってしまったが、何か考えがあつての行動ではない。もちろんその場しのぎだ。

とにかく会話だ。何か会話しないと。でも、特に聞きたいことなんか

……いや、あつた。

「そ、そ、そういえば、あ、朝は何の本読んでたの？」

どもりつつ俺がそう切り出すと、岸辺さんは無言のまま制服のポケットに手を入れて、今朝も見たメロンブックス謹製ブックカバーの文庫本を取り出した。

そのまま長い指でカバーを外す。

目に入ったのは 陽光を反射して輝く緑の背表紙に、金髪の美少女のイラスト。

「…… 『僕は友達が少ない』」

それは『僕は友達が少ない』という「ライトノベル」。略してラノベだった。

「僕は友達が少ない」は、ひよんなことから残念な美少女たちと「友達を作るため」の部活動を行うことになった男子高校生の物語だ。曰く「残念系青春ラブコメ」。通称「はがない」。いまやアニメ化もされた大人気作品である。

岸辺さんが手にしているのは、その「はがない」の六巻だった。しかも『<sup>星奈</sup>肉』の表紙がGJなドラマCD付き特装版。

だが、その選書はちよつと予想外だった。いや、彼女がラノベを読んでいることが予想外だったというわけではない。なんとなくコバルトとかビーンズとか、『マリアさま』とか『彩雲国物語』とか、それか『デュラララ!』とか、そういう類のものを読んでいるのかな、と思い込んでいたため、「男性向け作品」を読んでいることが意外に思えたのだ。

まあ、「はがない」を読む女子高生くらい探せばいるよな。

それがたまたま「美人」で「クラスメイト」で「隣の席」の岸辺さんだったというだけの話。

岸辺さんは本のカバーを元に戻しながら静かに口を開いた。

「……『はがない』はいいわ。だって、この本の中にはわたしの理想とする『青春』があるから」

「『青春』?」

「ええ。仲間がいて、かわいい女の子がいて、その人たちと日常をドタバタと過ごすの。それってすごく良くない?」

「ああ……まあ……」

もちろん俺も大好きですが、「好きなものはつきりと好きと言えない」初期装備スキルが自動発動して曖昧な回答に。思春期男子としてはストレートに「好き」と言うのはなぜか恥ずかしいんですよ。

岸辺さんはその俺の回答を特に気にした風もなく、「自分が好きなことを相手に話す」喜びからか弾んだ声で続けていく。

「美少女達と仲良くする学園生活。一風変わった仲間と一緒に経験する部活動や体育祭や文化祭。ラノベの世界はなんて素晴らしいのかしら！ そんな友達がいる生活に憧れを禁じ得ないわ！」

「へえ……ラノベが好きなんだね？」

思わず岸辺さんの手を取って握手したくなる気持ちを抑え、俺は当たり前障りのないことを聞いてみる。

「……ええ。中学に入るまでは漫画とかアニメがメインだったけれど、それからはずっとラノベにハマってるわね」

「中学に入るまでってことは、結構年季の入ったオタク？」

そう聞くと、岸辺さんはふっと寂しそうに息を吐いて、

「……そうね。小学校三年生のときからかしら。二年生までは一所懸命友達を作ろうとしてたんだけど、三年になってあきらめて。それでテレビでやってた最初の『プリキュア』を見るようになってからこの道一筋……」

そのエピソードは胸に来るな……。。

岸辺さんはいわゆる「友達ができないからオタクになった」パターンの人らしい。

「この道に入ってから一回だけ、自分がオタクであるってカミングアウトしようとしたこともあったのよ。クラスのオタクの女の子に積極的に話しかけて仲間に入れてもらおうとしたのね。でも……」

ああ……その先は聞きたくない。

「話しかけた子が泣き出しちゃって……。まさか泣かれるほど嫌われているとは思わなかったから、もうすっごくシヨックで。それから人に話しかけるのはやめたの……」

それは結構なトラウマだ。

美人には美人なりの悩みがあるということか。いや、ただの美人

ではなく「とてつもない」という形容詞がつく彼女の悩みは、きつと俺なんかが想像すらできないようなものなんだろう。

「だから、その……あの……わたし」

続けて岸边さんが何か言おうとしたそのとき、彼女の言葉を遮るかのように昼休み終了五分前の予鈴が鳴った。

岸边さんの動きが一瞬止まる。が、すぐに、

「放課後」

「はい？」

「放課後、また、ここで。それじゃ」

日本語を覚えてたての外国人みたいに単語のみ羅列して、岸边さんはいきなり立ち上がると逃げるように走り去っていった。

「

……え？」

俺はひとり屋上に残されて、暖かい春風に吹かれながら呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

午後の授業の始まるギリギリで教室に戻ると、すでに岸辺さんは何食わぬ顔で席についていた。

俺もそつと自分の席に座って考える。

岸辺さんが最後に言おうとしていた言葉は何だったのだろうか？

さすがに今日会ったばかりで愛の告白なんて期待するほどおめでたくはないつもりだが、もしかしたら「友達になってほしい」展開はあるかもしれない。いや、きっとそうだろう。だってぼっち仲間とか言ってたし。

だとしたらどうする？ 受け入れるか？ 断る理由はないけど、その、やっぱり岸辺さんみたいな美人と友達というのもすっごく疲れそうな気がしないでもない。

……などと悶々としていたら、あつという間に放課後に。

ホームルームも終わり、今日一日「岸辺効果」で静かだった教室も、さすがに緊張の糸が切れたのか昨日までと同じ騒がしさを取り戻しつつあるようだった。

生徒たちは教室に残って何か話していたり、示し合わせて教室を出て行くこうとしたりと、それぞれ思い思いの放課後を過ごそうとしている。

徐々に喧騒さを増しつつある教室内。だが、岸辺さんがおもむろに立ち上がった瞬間にそれが一変し、またぞろ水を打ったように静かになった。

クラス中の視線が岸辺さんに集中する。俺も彼女に視線を向ける。

そんな静寂の中。岸边さんは艶やかな髪をかき上げながら、隣に座ったままの俺を見下ろした。

そして

「……先に行ってるわ」

と、小さいがよく通る声でそう言い残すと、すたすたと教室を出て行った。

瞬間。岸边さんに集まっていた周囲の人々の視線が俺に移動。

「え、何、あいつ岸边さんと何かあるの?」「誰かアイツのことが知ってる?」とまあ、好き勝手にざわざわと。何か俺が悪いことでもしでかしたかのように騒ぎ立ててくれる皆さん。

俺はもういたたまれなくなって、急いでカバンに荷物を詰め込むと、一目散に教室をあとにした。

教室の扉を閉めた途端、我が一年二組の教室内が今日一番の大騒ぎになっていたようだ、俺は気にしないことにする。

考えたらたぶん負けだ。

岸边さんは施錠された屋上に続く扉の前で待っていた。

俺は扉の鍵を開け、彼女と一緒に屋上に出る。

途端、雑多な匂いのする春の午後の風が鼻腔に届いた。

日当たりのいい屋上は普段ならば叫びだしたくなるほど気持ちいい場所のはずだ。だが、いまの俺は別の意味で叫びだしたくてたまらなかつた。

おうちかえりたーい！

そうやって現実逃避気味な行動をとったところで、屋上に俺と岸辺さんがふたりきりでいる状況は変わらない。昼間もそうだったろ、と言われればその通りなので反論のしようもないが……。

とにもかくにも。ここまで来たら逃げることもできない。

俺は覚悟を決めて岸辺さんと向かい合った。

落ちかけ始めた陽の光が彼女の白い肌を照らしている。小さな顔のさらに小さな唇がゆっくりと開き、空いた口から輝く宝石のような白い歯が覗いた。

「早速だけど。昼休みにあなたが女の先生と話していたのを聞いてて、その……思ったのよ。あの先生、あなたに部活を作るように言ってたわよね？」

切り出しは唐突。

実はちよつと、ほんの少し、告白<sup>コウ</sup>られるのかもしれないと期待してたので軽く気落ちしたのは内緒だ。

「実はわたし、ずっと考えていたことがあったの。中学のころからずっと。その、わたしたちみたいなのぼつちの隠れオタには、居場所が必要じゃないかって」

わたしたちというカテゴライズということは、俺もすでにそこに入れられているようだ。

……はいはい。もうぼつちでいいですよ。認めますよ。

岸辺さんは無言で抗議する俺の反応を気にせず、そのまま話を続ける。

「教室では周りを意識して自由に振舞うこともできず、『隠さず堂々』としているオタクの人と話す勇氣もない。常にどっちつかずの姿勢で、周囲に聞き耳を立てていることしかできない……。それっ

て隠れオタの悲哀よね」

その気持ちはよくわかる。

ここまで共感できる人とリアルで会えるとは、と思うほどに。

「そう……だから、わたしはずっと考えていたのよ。だったら教室ではなく別のところで『隠れて堂々』としていればいいんじゃないかって。学校内の誰の目にも触れないような場所で」

岸辺さんがこちらをじっと見つめる。彼女の視線の圧力にだいぶ慣れてきた俺は無言でそれを受け止める。

「そんなとき、あなたとあの先生の会話を、その……立ち聞きすることになって。そこでわたしはピンときたのよ！ これだって！」

「これ？」

「『隣人部』よ！」

「……はい？」

ほかんとする俺。岸辺さんは何を言いたいんだろう？

「部活よ、部活！ アニメ研究会とか漫画研究会みたいな外からわかりやすいそうだったオタ系部活じゃなくて。オタクっぽくない部活。そう！ 『はがない』の『隣人部』みたいなの！」

「え、だから、何？ え？」

岸辺さんはまるで役者のように両腕を広げて、

「部活を作るのよ わたしたちの学校での居場所を作るの！」

「……居場所？」

「そこでなら、わたしたちみたいな堂々とオタクとして振舞うことのできない『隠れオタ』が自由でいられる……そんな場所！ 表向きは普通の部活だけど、でも実際は『隠れて堂々』とできる部活を！」

こういつとき。

たとえばラノベの主人公の場合、自分が巻き込まれて望まぬ「部活」に入らざるを得なくなった状況に悲嘆したりすることが多い。傍から見たら羨ましいにもほどがある立場だというのに。

だが、ラノベの主人公ではない俺は、岸辺さんの提案を聞いてわくわくしてしまった。

そう。わくわくしたのだ。巻き込まれたことに。

最初から。心の底から。

だから言う。はつきりと。

「好きなものをはつきりと好きと言えない」初期装備スキルの発動を押さえこんで。

「……いいな、それ」

「でしょ!」

岸辺さんは目を輝かせる。

「だから、あなたに協力してあげる! わたしたちの部活を作りましょう!」

その提案は大いに歓迎だった。俺としても一石二鳥である。しかし

「それはむしろ助かるけど。実際どうする? 表向きの部活の内容は? それに部名は?」

俺にしても昼に聞いたばかりの話なのだ。何も考えてないし、何も思いついてない。

「……そうね。申請するには堅苦しい感じにした方がいいわね。

うーん……ボランテニア系はすんなり申請が通りそうだけど、実際

行動するとなるとそれこそ休日にアニメを見ている時間も無くなるわ……」

「あと、そういう本当に依頼が来そうなのはやめた方がいいな。実際に教師や生徒から依頼が来たらあとあと面倒だぞ」

『第二ボランティア部』とか『奉仕部』とか。フィクションでは前例があるが、それはすべて生徒が持ち込んだ依頼に対処するような部活だった。それに正直、岸边さんがボランティア活動をしている姿は想像できない。

「そ、そうよね！　そういうのじゃなくて。部室にいただけで完結するようなのがいいと思う。それでいて部室そくで本とかを読んでいてもおかしくないようなもの……。そうなると研究会系よね……」

そこで、一瞬考え込む岸边さん。

「むー……。とはいえ現代視覚文化じゃそのまますぎるし、歴史や哲学はちよつと違うわね……。でも、そういうんだか荘重な感じのするようなものがいいわ。宇宙とか真理とか精神世界とか！」  
真理とか精神とか……。そういえば実家にいた頃は、仏教の説法で耳が痛くなるほど聞かされた言葉だなーと思いつく。

「……真理ねー。なんか仏教の教えみたいだな……」

で、俺は思わずそうつぶやいてしまったのだが、

「仏教？」

「ああ。俺は実家が寺なんでね。曼荼羅だのなんだのいろいろと教わったよ。あと禅とかもやらされたっけ」

「禅！？」

その言葉に岸边さんがすごい勢いで食いついた。

「それよー!!」

「え？　どれ？」

「禅！ 禅よ！ 禅を研究する部活っていうのはどう？ それなら活動内容を聞かれても、なんかありそうなことを適当に言ってごまかせそうだし」

「……いや、その、それは俺の口からはなんとも……」

たしかに仏の教えというのは、かなりその……解釈によっているといい加減なところがあるわけで。まあ、それが魅力でもあるんだけど。

「あなたのご実家がお寺というのはさらにいいわ！ そうね……うん！ なら禅文化研究会……いえ、これだと本当にありそうだから……うん！ 『禅道研究会』っていうのはどう？」

「禅道？」

それが部活名というのはいかなものだろうか、という気持ち顔に出ていたのかもしれない。岸边さんは腕組みして何もかもわかっているという風に頷く。

「あくまで表向きの名前よ。あなたのお姉さんが顧問になられるのなら、なおさらあなたの方ご姉弟のご実家がお寺であることを最大限に利用した方がいいわ。それにそういう部活名ならさすがにオタクが集まっているとは思われないでしょう？」

いや、そうだけど。今度はなんだかスピリチュアルな人が集まっていると思われないか？

……とは思ったけど、それこそ実家が寺の俺が言うべきことではないと口をつくむ。

「これなら学校側への説明は成り立つと思うし、いけそうよね。じゃ、次はお決まりの略称よ！ 『SOS団』とか『自演乙の会』みたいな。内輪での呼び方ね」

さすが定番お約束をよくおわかりで 俺は心の中で苦笑い。

とりあえず部名は『禅道研究会』で行くことになったようだし、

俺もそれでもう異論はない。なら、ここはひとつ前向きに検討しようと思う。

そうだなー……『禅道研究会』を略すとなると、ぜんどうけん、ぜんどうかい。ぜんけん！ じゃ、一昔前の萌え四コマだしなー……ぜんどう、ぜど……ぜつど……？  
そして、つい。ぼろつと。

「 Z……会」

「……Z会？」  
きょとんとした顔で岸辺が繰り返した。

「あ、いや、忘れてくれ。そのまんま過ぎ  
と、焦って取り消そうとする俺の言葉を、  
「なるほど……『禅道』から頭文字を取って『Z』。どこかの予備  
校みたいなのそのものズバリな名称だけど、いいわね、それ！ 中2  
マインドをガンガン刺激してくれるわ」

岸辺さんがなんか食い気味に俺の方に身を乗り出してきた。俺の視線のちようど先に彼女の端麗な顔が迫り、ちよつとどころでなくかなりドギマギしてしまう。

「『Z会』！ うん、決定よ！」  
どうやら彼女は『Z会』という名称を大変お気に召されたらしい。  
これで確定のようだ。

「それじゃ、これからは『仲間』ね……えと」  
岸辺さんは至近距離で興奮気味にそう言い、途中でなぜか小首をひねる。

「……で、あなたの名前はなんて言うの？ わたし今日学校来たば

かりだから、実は知らないんだけれど……」

いまさらかよ！

「つーか名前も知らないヤツとずっと話してたのか！ という言葉をぐつと飲み込んで、俺は自分の名を名乗る。」

「吉良だよ。吉良一途。吉良上野介や吉良吉影の吉良に、数字の『』に途中の『途』と書いて、『イチズ』と読む」

「そう。じゃよろしくね、キラ！」

俺の名を聞いた彼女は、楽しそうにそう言って 笑った。

「……」

俺は思わずぼーっと放心。

俺はさん付けなのにそっちは呼び捨てかよ！ と思うよりも先に、その岸边さんの輝くような笑顔に見惚れてしまう。

彼女が笑ったのを見たのは初めてで。こいつずっと笑ってればいいのにと本気で思ったりして

そして。

気付けば 岸边さんの視線にも慣れていた。

もう彼女を前にして声が出ないこともない。

空はいつの間にか夕暮れになっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3500ba/>

---

俺とZな彼女たち

2012年1月11日22時00分発行